

## 事例

## 3-4-8：木村屋菓子店（宮城県柴田郡村田町）

（菓子製造・販売）  
〈従業員1名〉

「老舗菓子店を守り銘菓を開発することで、  
歴史と文化の蔵の町『村田町』を活性化する」



代表 木村正隆氏（右）と淳子夫人（左）

## ◆事業の背景

その昔、繁栄を謳歌した蔵の町、村田町で、  
後継ぎとして老舗菓子店を切り盛りする。

仙台市内から高速道路を使って約30分、仙南と呼ばれる宮城県の南部に村田町は位置する。古くから明治初期にかけて、染色に使われる特産品の紅花交易で大いに栄えた地域である。さらに、江戸から仙台方面と山形方面へ向かう分岐点でもあり、多くの商人が行き交う物資輸送の要衝として、豪商たちが富を蓄積していった地域といわれ、その名残は町に点在する多数の立派な蔵に見て取れる。また、穏やかな地形が京都を思わせることから、「みちのく宮城の小京都」とも称されている。

しかし明治中期から、染色技術の近代化や鉄道が海側に開通したことで、村田町の繁栄の勢いは次第に衰え、現在では過疎化と高齢化が進んでいる。

この歴史ある村田町の蔵の町並みの一角に、木村屋菓子店がある。創業は明治37年（1904年）、100年以上続く老舗の菓子店である。店舗はさほど大きくはないが、町内の常連客に愛されて「まんじゅう」や「もち菓子」、「ようかん」など和菓子を中心に製造・販売している。特に自家製の餡にはこだわりがあり、熟練の職人が丹精込めて作っているという。

「高齢で早起きのお客さまに合わせて、朝は7時から店を開けます。また店が閉まっても母屋に来られる方にはいつでも対応しています。うちのような菓子店が町内には4店舗ほどありますが、それぞれ常連客を持っていて競合なんてありません。」と、4代目の木村正隆氏は穏やかに話す。

## ◆事業の転機

季節やイベントに合わせて、  
オリジナル商品を開発。

県産品として推奨されている「梅羊羹」など、和菓子を主力商品としている木村屋菓子店だが、村田町の歴史や風情を取り入れたオリジナル商品にも力を入れ始めている。

800年の歴史を誇り、秋に蔵の町並み一帯を通行止めにして盛大に催される「布袋（ほてい）まつり」のお囃子（おはやし）にちなんだ「布袋の太鼓」。白鳥神社の樹齢300年以上といわれる古木名木にちなんだ「蛇藤まんじゅう」や「けやきサブレ」、「いちょうの舞」。特産品の「そらまめ」をパウダー状にして餡に練り込んだ「そらまめくん」など、意欲的に新商品の開発に取り組んでいる。

「その他にも、特産の蕎麦やブランドとうもろこし『未来』を使った商品など、季節やイベントに合わせた村田町の“銘菓”を作りたいと考えています。また村田町のキャラクター『くらりん』を冠したパッケージデザインなども工夫したいと思います。」

村田町には、「布袋まつり」のほかにも、空き店舗や蔵を活用して80名以上の陶芸家が集結し作品を出品展示する「みやぎ村田蔵の陶器市」がある。毎年多くの来場者が県内外から村田町にやって来るといふ。そうした観光客向けにオリジナル商品を紹介して知ってもらい、リピーターを増やしたい考えだ。

「道の駅村田には月間約2,000人の来場者がありますし、蔵の町並みにも月200人程度の観光客が訪れます。それを考えれば、アピールできる商品を開発すれば勝算はあると思っています。」

しかし、強力な競合店が現れた。県内の有名な菓子店が、道の駅村田近くに出店するというのだ。

## ◆事業の飛躍

有名菓子店が村田町に出店。  
オリジナル商品の商標化で対応。

「驚愕とまではいきませんが、危機感を覚えましたね。それで、村田町商工会の赤間さんに相談しました。」

木村氏自身も村田町商工会の理事を務め、また元青年部の部長でもある。有名店の出店は、町全体の問題だと考えた。

相談を受けた村田町商工会の経営指導員である赤間利明氏は、木村屋菓子店が開発したオリジナル商品のブランド化を急ぐ必要があると感じ、商標登録を



村田町商工会 経営指導員 赤間 利明氏 (左)  
宮城県よろず支援拠点 コーディネーター 田中 宏司氏 (右)

勧めた。しかし、商標登録申請は専門的な知識も必要であるため、宮城県よろず支援拠点のコーディネーターである田中宏司氏に協力を依頼、宮城県発明協会とも連携して木村屋菓子店への支援を開始した。

まずは、看板商品の「けやきサブレ」と「いちょうの舞」の商標登録に関して、発明協会へ調査を依頼したところ、「けやきサブレ」は一般名称の組み合わせであり文字商標での登録が難しいため、図形での登録が妥当との回答を得た。一方「いちょうの舞」は一般文字での登録が可能ではないかとの意見であった。現在は商標登録願が完成した段階で、今後、申請時期や費用対効果などを勘案して、次のステップへ進めていく方針だという。

「商品を商標登録するなんて、これまで考えてもみませんでした。商標登録自体の効果はこれからの話ですが、家族でこのことを話し合う機会が増えたことで、店の将来を考えるいいきっかけになりました。」と、木村氏は支援の効果を語っている。

これまでは、村田町の老舗菓子店として住民とともにあり続けたいと考えていた。しかしこれからは、積極的に商品を開発してブランド化し拡販するという“攻め”の意識を持たなければ、事業の継続すら危ういことに気付いたということだろう。



蔵の町並みに位置する木村屋菓子店の店舗

#### ◆今後の事業と課題

店を守ることは村田町を守ること、  
木村屋菓子店の将来を拓く。

「まずは、この店の経営を固めて販売を強化することが大切だと考えています。そのためには堅実に販路を拡げていくことが第一です。その次は生産能力を上げること。今は2名の職人で手いっぱいなので、包装作業の機械化などで対応できればいいと思っています。余力ができれば商品開発やパッケージデザインのアイデアも出てくると思います。」

村田町商工会や宮城県よろず支援拠点も、助成金制度などを活用しながら、木村屋菓子店への支援を続けていくとのことだ。

木村氏は菓子店経営の傍ら、「布袋まつり」の実行委員や、村田町の蔵を活用したまちづくりを推進するNPO法人「むらた蔵わらし」の理事を務め、村田町の活性化を進める若手のリーダー的存在だ。村田町を愛する所以だろう。

「村田町の文化や歴史を守っていくためには、村田町で商売を営む我々のような事業者が元気でなければなりません。『木村屋菓子店を守る』＝『村田町を守る』ことでもあります。負けられません。」

「村田町に木村屋菓子店あり」と称される日も、遠くはないかもしれない。



オリジナル商品「布袋の太鼓」「けやきサブレ」「そらまめくん」